



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

2018年度活動報告 CJP授業 : 口頭表現C

著者	山本 真理
雑誌名	関西学院大学日本語教育センター紀要
号	8
ページ	91-91
発行年	2019-03
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028125

2018 年度活動報告 CJP 授業：口頭表現C

山本 真理（関西学院大学日本語教育センター）

1. クラス概要

レベル1～2（初級前半から後半）の学生を対象とした1週間1コマ（90分）の授業である。「語り」と「やり取り」の両方に重点をおいて授業を構成した。授業活動は以下の3つのパートに分けられている。

2. 授業内容

(1) **モノログ再生活動**：学期前半に日本語でまとめたことを語れるようになることを目的として行った。『わたしのほんご』（くろしお出版）の3課分を扱い、モデル語りの再構成活動、自分の語りを行った。学生は回を追うごとに、既有知識の中で発話を組み立て、自分の経験や気持ちを語れるようになっていった。

(2) **状況に合わせた会話活動**：学期後半に日々の生活の中で「困った状況」を持ち寄り、「日本語で言いたいこと」をクラスメートやLA（ラーニングアシスタント）とのやり取りを通して学ぶ活動を行った。この活動は小林（2016）¹を参考にしたものである。学んだ成果を用いて最終的にグループでミニドラマを作成し、演じた。学生は必要な表現が学べるだけでなく、活動の過程で可能な限り日本語でLAに自分の状況を伝えることによって、日本語でやり取りをする機会にもなった。

(3) **グループスピーチ活動**：日本語で話すことに慣れていない学生が安心して語ったり、やり取りできるようになることを目指して行った。活動は、学期を通して一人2回ずつ行った。毎回発表者は5名程度おり、小グループに分かれて座ったまま発表をする。発表が終わったら次のグループに移動し、同様に発表する。これを4回程度繰り返した。発表者は発表の回を経るごとに質問への応答にも慣れ、聴衆役の学生らも反応をしたり質問をしたりすることに慣れていった。

3. 成果と今後の課題

「(2) 状況に合わせた会話活動」について、大変役に立ったなど好意的な意見もある一方で、課題が大変など否定的な意見もあった。今後は、上記3つのパートのバランスや学生に課す課題の質と量の見直しを行う必要がある。

¹ 小林ミナ（2016）「複言語・複文化時代の日本語教育における日本語教師養成」『複言語・複文化時代の日本語教育』凡人社